

## 2000年クリスマス劇体験記 ～ぞんざいな宿屋の主人セルヴィルス役を引き受けて～

北畑 和之

私は、この役を軽く引き受けたわけではありませんでした。

それは、①中学校のクラス発表会以来、劇や芝居（らしきもの）とは無縁であること、②一昨年のクリスマス劇は都合で見に行けず、結局クリスマス劇を一度も見ることが無いこと、③釈迦の生い立ちについては興味もあってある程度知っているが、イエス生誕やその背景についての認識が薄い（ヨーゼフとマリアの関係をこの劇に出演して初めて知った程）ということ、④出演した場合、当時4歳の次男が私と劇中の私を区別してくれるだろうかという危惧、のためでした。

しかし、私に依頼があった時、もはやゆっくり考えてから返事をするような時間はありませんでした。たしかそれは、上演まで残り10日を切っていた夜のことだったと思います。

中村真理子先生からとても深刻そうな声で電話がかかり、「出演予定者の都合が悪くなり、劇の開催が危ぶまれる事態となっている。私が出演してもよいのだが、去年マリアの役をしているので、そのマリアが**ぞんざいな宿屋の主人**の役をすると去年のイメージの残っている子供たちへの影響が心配で…。どうか北畑さん、日は無いけれど、**セリフは一言**なので、今からでも十分間に合うから、引き受けてほしい」と、いった内容だったと思います。

もう、他に頼めそうな人も無いようでしたし、こんな素人の私の出演で劇の質が落ちて、中止になるよりはましだろう、という思いで引き受けることにしたわけです。

ところが、その後送られてきたFAXに書かれていた私のセリフの長いこと長いこと。私にとっては、とても「一言」には思えない量のセリフでした。

さらに私の認識の甘さを痛感することがありました。それは、何と大の苦手な**歌がある！**（しかも6つも歌がある）ということでした。人前で歌を歌わなくてはならないなんて、そんなこと事前に知っていたら決して引き受けることはなかったのに、もう後の祭りでした。

残り数日という時、私の元に楽譜が届けられましたが、まさしく音楽音痴の私（とその家族）には楽譜からメロディーを引き出す術は無く、もうこの際「ロパク」で誤魔化そうかと思ったのですが、最初と最後の歌は客席を通りながら歌うので、そういうわけにはいかないということが判明し、私は慌てました。テープに吹き込まれたものがどこかにあるのではと思立ち、関係者に連絡して、テープの在処を突き止め、借りることが出来、ほっとしたのもつかの間、コピーにコピーを重ねたらしいそのテープを聞くと、肝心の最後の歌が消えていて入っていないではありませんか。

私は、その時ほとんどパニックに陥り、とにかく大久保先生に電話してメロディーを教えてもらおうとしたのですが、「私はのどを痛めているので、津吉先生にお願いしてください。」という返事でした。そこで津吉先生に電話をしたのですが、電話が繋がらなかったり、不在やらで、どうしても津吉先生と連絡がとれません。これはどうしたものかと困り果て、出演者であり、当時わが子の土曜クラスの担任であった内海先生に相談の電話をかけました。

しかし、マイク等の録音機器をすぐに用意出来そうに無く、電話口で歌ってもらって何とか覚えようかと思った時、ふと**留守番電話**の存在に気づきました。そうだ、これに吹き込んでもらおう！これなら何度も聞き返して覚えられる、ということで、いったん電話を切って、留守番電話状態にしてから、内海先生に劇最後の歌を吹き込んでもらったのでした。

この留守番電話のおかげで私は最後の歌のメロディーを知り、本番で歌うことが出来たのです。（内海先生、本当にあの節は有り難うございました。この場で改めてお礼申し上げます。）

この吹き込まれた歌に合わせ、私は何度も練習しました。留守番電話にイヤホンジャックが無いため、再生するたびに内海先生の歌声が部屋中に響きました。おかげで私より先に子供が歌を覚えてしまい、歌を覚えた子供たちは、ますますクリスマス劇を楽しみにするようになりました。

また、当初心配していた次男のことですが、自宅でセリフを練習する私の姿を見て、劇のお父さんは演じているんだと分かったようで、その点、ひと安心出来ました。

ゲネプロといわれる前日の通し練習まで、結局私は1度しか出演者の皆さんと練習することが出来ませんでした。その時の私の悲惨だったことといたらありませんでした。セリフは出てこず、そのセリフも関西弁の口調になってしまう…。暗澹たる気持ちでゲネプロに臨んだ訳ですが、そのゲネプロでは、衣装の問題やら、「セルヴィルスはでっぴりと太ることが出来ないかしら」といった監督からの要求があり、本番前夜にあわてて対策を考えたりしました。

そんな、ドタバタがいっぱいの中での本番当日。ドーランや化粧をするのは初めての体験で、しかも演劇特有のどぎつい化粧に最初とまどいましたが、2回目の上演の時には、ちょっと大胆になり、眉間のシワやヒゲなどを書き足し、かなりパワーアップした顔で出演することが出来ました。

演技の方は自分では良かったのかどうかは分かりませんが、精一杯やり終えたという充実感と、出演したからこそ味わえる感動をしっかりと味あわせていただきました。

以上、私のことばかり書き連ねた体験記でしたが、羊飼いのクリスプスの背中の埃がこちらの思惑通りうまく舞うような素材探しや大道具・小道具作りなど、細かいところでも色々な苦慮があったようです。私は最初から関わっていないため、全体が見えていませんが、マネージャーを務められた皆さんなど陰の相当なご努力の上に劇が成立していることも見過ごす訳にはいきません。皆さん本当にどうも有り難うございました。

最後に、2000年の劇で忘れてはならない逸話をここに少しだけ触れておきましょう。

それは、大場先生の**羊飼いのシュティール役3日前伝説(！？)**です。

多忙のため、セリフ一言のセルヴィルスの役でさえ断っておられた大場先生のお家に、上演3日前の夜、扉をドンドンとたたき音がしたかと思うと、「シュティールはおらんかね？」といいながら羊飼いのガルスが入ってきました。ガルスは、食事中の大場先生の肩をつかむなり、「シュティール、いっしょにやろう」と言ったそうな…。当日の見事な演技は、どう見ても3日前に決まった役とは思えませんでしたよね。この当たり、さすが、伝説を生み出す大場先生なのでありました。